

## はじめに

室町時代、幕府との外交交渉に訪れた朝鮮の使節が寄港した際、その繁栄に「高低の板屋は蜂屯のごとし」と感嘆した町がありました。「板屋」とは屋根のことで「蜂屯のごとし」とは密集している様を表します。この賑わいをみせた港こそ、古くは大輪田泊と呼ばれた兵庫津の港です。同じ頃に残されている港の積荷の記録からは、各地の数多くの船が寄港し国内のいろいろな物資が兵庫の港を經由して流通していたことが覗われます。さらに兵庫津は、古代には平清盛による日宋貿易、中世には足利義満による日明貿易の拠点とされ、江戸時代に入ってから朝鮮通信使の寄港地となります。また幕末は、長い鎖国政策からの転換となる開港場として選ばれるなど国内ばかりではなく国際港としても重要な役割を果たしてきました。

## 今回の調査地

江戸時代中期に描かれた非常に正確な絵図によって兵庫津の町の様子を知ることができます。

戦国時代末期に築かれた兵庫城（その後陣屋（御屋敷））を中心として、周囲を堤と入江などによって囲まれた中に、街路によって区切られた町があったことがわかります。今回調査が行われているところは、陣屋のすぐ南東にあたる新在家と呼ばれる町にあたります。

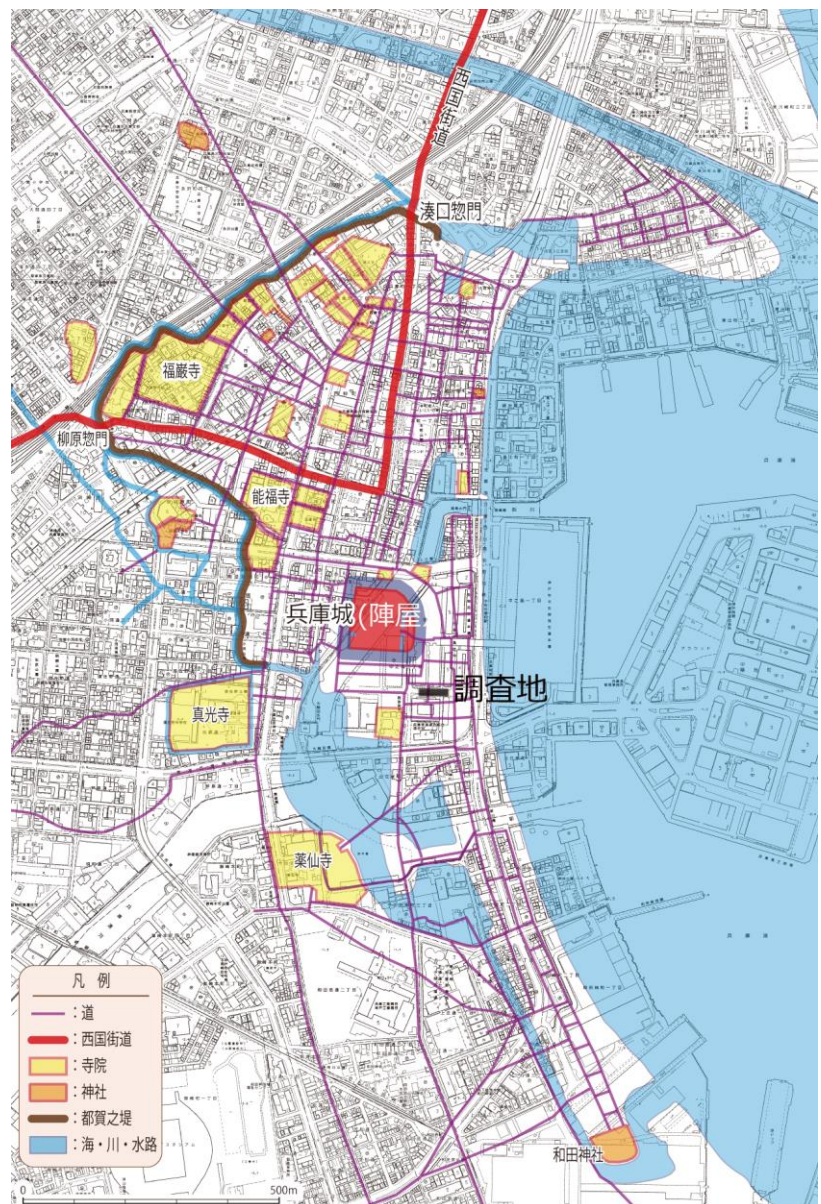
この町は、「浜本陣」と呼ばれる、特定の西国の大名家と深く結びついて取引をおこなう商家が建ち並んでいたことが知られています。

また、北側隣接地の調査では、兵庫城をはじめその周囲の城下町が確認されています。

## 調査成果

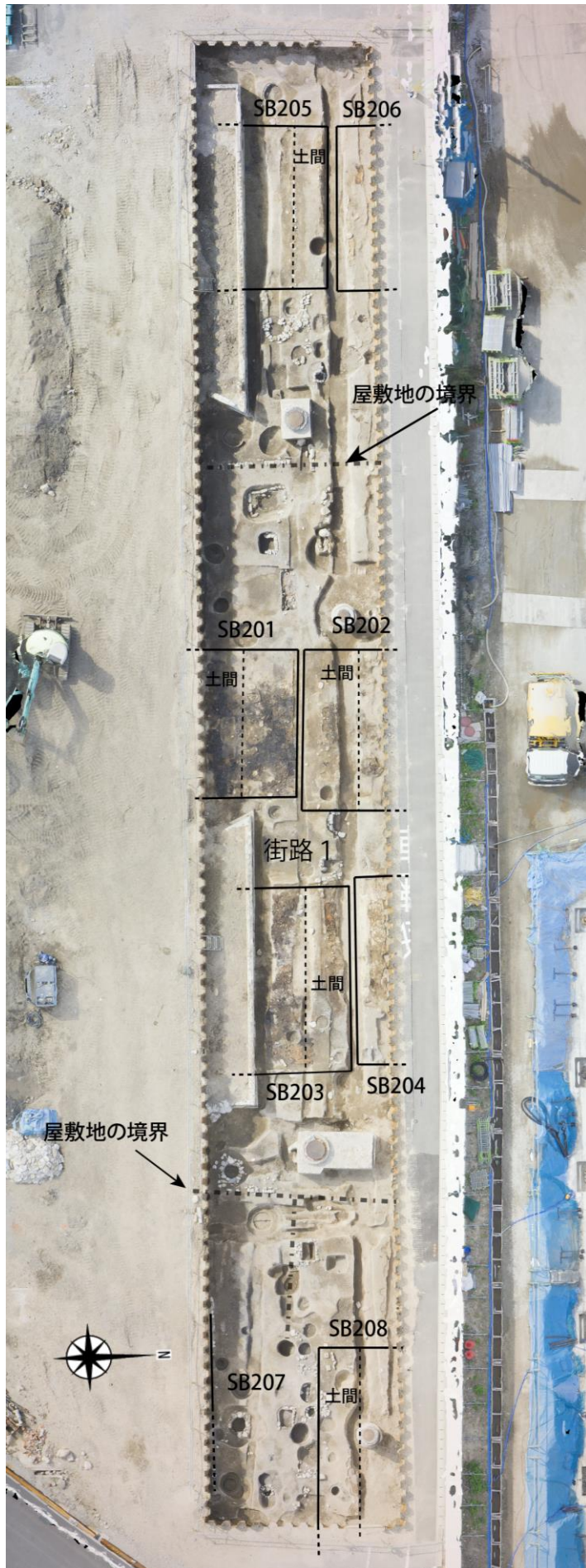
今回の発掘調査では、江戸時代初めから後期にかけての4～5時期の町の跡がみつかっています。

主な遺構としては、街路をはじめ町屋とよばれる都市特有の建物やこれに伴う井戸やごみ穴、貯蔵施設と考えられる石組み遺構などが確認されました。



現在の地図と元禄絵図の合成図

元禄9(1696)年に兵庫津奉行が尼崎藩に提出した「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」を、現存する寺院などを基準に、現在の地図と重ね合わせました。



## 調査区全景

江戸時代中期の町屋と街路（SB201～SB208）

特に、江戸時代中期の遺構面は火災に遭ったようで町屋には焼けた落ちた建築材や壁土が積もっていました。

## 見つけた主な遺構

**町屋** 調査区内で7～8棟が確認されました。いずれも出入り口がある間口が狭く、奥行きが長い長方形の平面構造をもち、片側に土間、反対側に床張りの部屋を縦に2～3室配置するタイプのものです。土間には、造り付けのカマドが設けられ、床張りの部屋には、イロリが切られています。

礎石のすぐ下からは古い礎石や礎石を抜き取った痕がみられるので、同じ敷地のなかで盛土などの整地をしたうえで繰り返して建替えが行われていたようです。

**井戸** 瓦状の枠を円形に積み上げたもの、自然石を組み上げたもの、加工した石材を利用したものなど10数基がみつかりました。いずれも江戸時代中期以降に造られた新しい時期の井戸です。

**石組み遺構** 四角形や円形に自然石を何段か積んで囲んだ石組みの施設です。一部石の替りに板や瓦を使用したものもみられます。貯蔵用の施設と考えられます。



**埋桶遺構** 穴を掘って桶を埋め込んだ遺構です。中に入っている土からは、魚の骨や鱗、貝殻などが多く含まれています。ごみ穴として使われたと考えられます。



今回の調査にあたり神戸市経済観光局、(財)神戸すまいまちづくり公社のご協力を得ました。

